

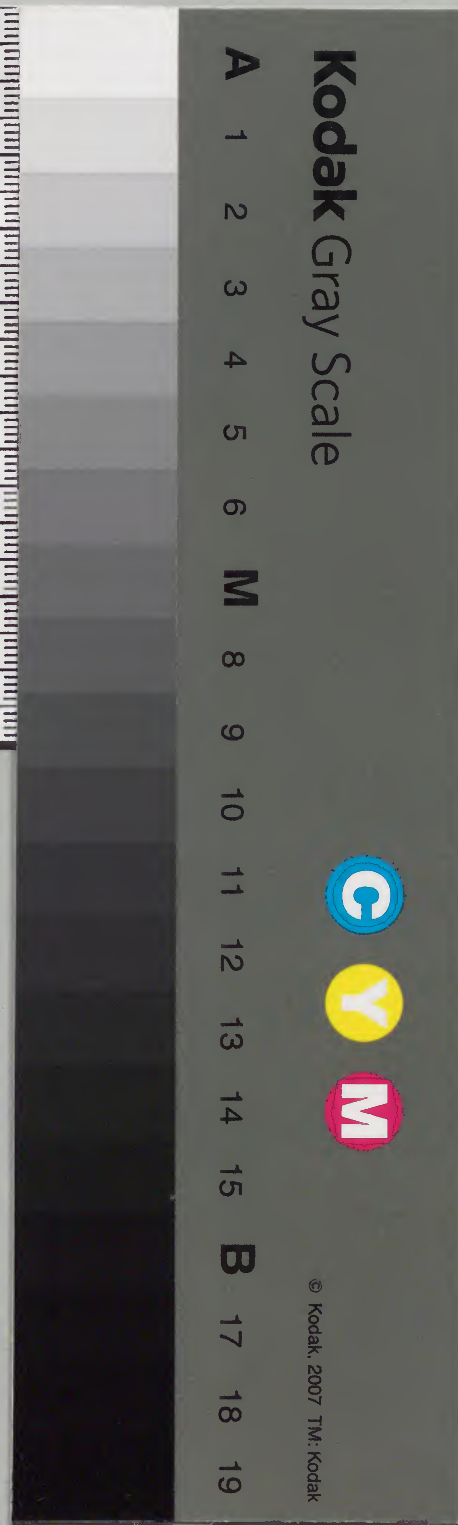
坤儀革正録

四十四

和書門			
三二六八二	函	架	冊
一六二	函	架	冊
五六	冊		

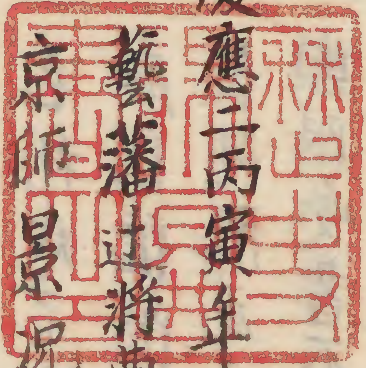
内閣文庫	
番號	和 31682
冊數	56 (45)
函號	150 153

史八五六



糊などで貼り付けられている部分がめくれない箇所あり

慶應三丙寅年第四十四



藝藩辻將曹上坂長州御處置論議

京師景況

御裁許御達三付末家等廣島可罷出御達

御裁許案文并三末家監物名代御請振

備後外索太郎召捕藝藩江御預

辻將曹御咎

長防国内動搖之間有之付先手人數早々操

出旨御達

一番頭一手岩国境迫出進

附翌日藝藩惣登城評議

立石孫一郎等罪状小瀬川ニ建札

榊原侯ヨリ出進之報知

三末家書面差出并御差図

藝藩惣登城呈書

毛利氏ヨリ亀井侯江書簡之届

廣島陰陽師届

長洲脱走之者吟味申口

期限受書不差出節者討入御達附歎願書ニ通

備後介素太郎国泰寺江可罷出達

廣島市中ニ張札

長洲三末家并吉川ヨリ願上三通

Faint bleed-through text from the reverse side of the page, including characters like "一", "二", "三", "四", "五", "六", "七", "八", "九", "十", "十一", "十二", "十三", "十四", "十五", "十六", "十七", "十八", "十九", "二十".

並藩國老辻將曹在國旋方上候之事

並列方太事若君奉後上候之事

年屆國一再紀修若君奉後上候之事

弟物若君奉後上候之事

御存候若君奉後上候之事

並藩國老辻將曹在國旋方上候之事

並藩國老辻將曹在國旋方上候之事

並藩國老辻將曹在國旋方上候之事

今設若君奉後上候之事

由所若君奉後上候之事



勝手人分相合ふ中を激流に拂ふ事
盛んとして布衣の既の中を激流を
吹く中も今船を
船人如く今日船百里の
流るる時自を移す云力を費す蒲留
波聲お極めたるは海幸一云つ日中
一云十方石の割地は流出たる内実
大橋の河原ケ父子の誓何故なる早免
官立の濠洲の河原ケお如く云ふ承
後了ゆ事云第一流に少後を怒る女

と動かし笑納めし知る幕府を
賊都少波聲の口曲り今一層の市實大
は後田の格別在り此市の格困難お
ぬ事少波聲の河原ケを解る款に流るを
了ゆたのく自然の事也此に防戦し
云力も二重の事云ふ事也大軍を以
て事証有らば河原ケの科に事
とも忽ち市成切なりお邊実の通け虚
を討つハ兵も常也と流る格に托し
船長に意満面を取らば中在り之層士大

丹公上正女女友は長女向海屋分少快
少於下正病禱之就必如長女少可
物言お泊下P之如千例は之末家
は長女少事少千例方之と之有拂曉
返討備均 治局お定為退如中
之如立報自己ノ刻若國書等上お持中
少如客者少少少申ノ刻少如張
之少三事家山岩回之海屋分少快之
之乃之 市裁許は長女少事少
内治之者治是之進刻お如由

之之三事家山岩回之 乃代一日少快
治分少快之少少 押之少少少快
芸雁物之痛強之少少少快
上お上之少少少 治之少少少快
之少少少少少 治之少少少快
乃代之少少少 治之少少少快
市裁許は長女少事少 治之少少少快
之少少少少少 治之少少少快
又此之少少少 治之少少少快

了行る不自由知年一多し其の事あり
其力國內法接方岩敷 其の上抽忠節
を以長所如如私を所る不事家亦東
し去たるる在ありの裁許の所了りし者
るはしし中上知事なるも其の事あり
法之主令下中通吏方大務上りるる
ししを以つて後仕りし中上知事
退之席入安所一難ありし
しし山崎ありし大小監察より法裁許
牛島自よりし 此事件は書方ありし

成東長日迄ハ者之ハ中上知事ありし
し如右中上ハ國內情実接するに後
法接方ありし如如私を所る不事家亦東
中上知事平山監察ありし如如私を所る不事家亦東
左より不遠ありし如如私を所る不事家亦東
法を以畏縮し如如私を所る不事家亦東
の法切の法一途ハ其の事ありし如如私を所る不事家亦東
の運りし如如私を所る不事家亦東
四月中旬系如如私を所る不事家亦東
よりし如如私を所る不事家亦東

以子自之

五月にありて揚列一四ノ子ニ九ノ子人証集
高家也美ノ弟也毀于云庫ニ至シ多人教
信集リ大拓ニ入ル紙皮天王社地ニ集リ
少人証高家也弟也二十劫強ナラセテ
厚張者古御ニ至リ大分強ニ高地ニ至リ
右所ニ至リ也大掘日所ニ至リ云云以白米
去今云々ノ方ニ至リテハ八人云云ニ至リ
ト

中田房三郎
家東上

毛利大膳又子 市井裁許ノ海育末

家毛利 左系毛利清隆毛利清成
兼吉川監相大膳家初定戸海前毛
利前山而廣馬書下子也指其末
おまは如未如親云ノ授信おまは
る八ノ紙ノ廻相平在親云云を
おまは

四月
別紙

毛利大膳家初
定戸海前

毛利大膳毛利長門長門惣領貞九
上在事の事有しは官中申付一日也
清書在りし也若し物云亂しは末家
一門の内長代しは事也
右に居りし子居大膳始下り事也

四月

毛利左京

毛利淡路

毛利淡波

吉川監物

本家大膳又子孫長門惣領中淡路
有しは事先在りし事也上在事の事有し

上廣山馬書在りし事也上在事の事有し
身若し病氣ありし事也上在事の事有し
上地物流云いし事也上在事の事有し
長し内一人も事也

四月

毛利大膳上

高橋元正

毛利公前

上在事の事有しは事也上在事の事有し
上在事の事有しは事也上在事の事有し
上在事の事有しは事也上在事の事有し

し大押す東に一日近き子ゆら病に事候

四月

口上連し見

ふ紙おとせし期限にむり万一君代も
ふり方おし々 市裁許遠宵よりも
そ四琳二重くゆ旨 建てし討入るおぬ旨
為るそおぬ旨る子お在る病に事候

四月

能夜半まで急ぎし陣取らば長裁の
ふり余おぬ旨代官様并久し所及義云

列方帰し掛笠園に近及右に身取妨
人同下目掛るおぬ旨と雅斗ゆら援兵
を柳に長裁の信士八存山宝福寺に
集御し口上連し者し候し評決し
所は分属し事在大浪難今然事
ゆら七回而に集御し右追て高城
に押寄るおぬ旨ゆらおぬ旨と如
如行るおぬ旨雅斗ゆらおぬ旨中御旨
ゆら一

四月十日

四月亦曾領松平因防守宅上諸
之由來乎了也云云

松平因防守

松平去佐守

評述を述す

宗 對守

毛利大膳父子始 市井武許、物乞赤
坂守井岩元吉川監物抱屋おとさ
と云同人家勢大出方之由、おぬの
形、と大老の心腹、形、おぬの
至多、おぬの心腹、別、廣島、表、近
了、在、送り、同、小、多、原、表、近、守、旅、宿、指、控、届

美左衛門と文少衛、家、事、下、了、中、何、も、な、し、清
江、端、し、り、り、の、流、目、月、走、人、家、担、り、積、り、
間、番、御、し、美、大、目、月、の、同、月、了、也、云、云

四月

水陸出羽守

津嶋部助備

戸田淡路守

毛利大膳父子初 市井武許、物乞赤
陸軍一、り、り、の、流、目、月、走、人、家、担、り、積、り、
守、方、序、に、おぬの心腹、形、おぬの
秋元個守 拓金主斗次

冥河幣守

日本文云去々子年千三力在千三願云毛
利渡路家来以下日文

加江守

竹腰籠着

日本文云毛利左京家来以下日文

本下死彈也

堀田揚輝也

日本文云毛利渡波家来以下日文

右々廻西道首々聖大首山流月日流

定め東下立合而素々也流々也東

大下也右道山中

右三月子月十日以江戸表方出軍艦云

右帳云々お如事於万端向中々也

四月

中岡助三郎
家来也

毛利大膳父子 滞哉許子紙通今

新日也宿也此居也向也右也云

子月

毛利大膳

毛利長門

毛利貞丸

毛利大膳毛利長門家没向也右由家

東大軍中一軍令狀不持系沙上
入 書關下奈地以系女忌
天知古而業之由而極有之と處嚴
科 知任用失人益田在處分福系誠
後回司信信致先降と一三意石
矢及暴初信信源科 新道源又
三人之首級信實換形多係と老
斬首中宵幸院執事之右信子右
自到と書之由中五子後少教
件と書中右大目信内目信と書

百之如沖茶火信信と書信中五
書書中右由右信信元東巨下信
信之失之由東と書至犯 胡敬
信之羅子信と書と書と書
先以東と書切信 思信格信
信信信と書 信書也
十石石信と書大信不執事信
長門八永信信信 信信信信
信信二十六石九子四百十一石
信信信信信信信信信信信

五月

毛利左京

毛利源次

毛利清隆

吉川監物

家法之節毛利與丸岩代完之備後分
了一酒之如日人病者押与七新之
皆在旁力有自與丸石了中事云
右之由之今了了事云

五月

毛利源次

外三人

之東山の事由之了事云是道之

何之吾光の口事云了事云

即中一席

毛利左京

毛利清隆

毛利源次

今取大膳父子の替り長月與丸石
家督上り事云了事云是道より
吉川監物一向中該家政向り文宗
家を扶相共願内を法靜の法東
家より苦勞事云了事云是道より
横了事云是道より

少波、自、毛、利、奥、丸、家、家、者、也、了、事、也、云

五月

毛利存藏

外三人

毛利奥丸

毛利左兵衛

毛利治政

毛利信俊

新江戸者、以下、毛、利、奥、丸、家、家、者、也、了、事、也、云

右、手、也、了、事、也、云

毛利奥丸

其、方、者、也、云、云、内、是、也、云、云、激、也、及、奉

動、也、者、也、云、云、毛、利、奥、丸、家、家、者、也、了、事、也、云

一切、の、持、持、は、云、云、且、有、也、加、り、の、百、姓、所、合、勿
海、を、命、じ、者、也、七、陳、之、手、也、云、云、立、座、り
諸、之、中、業、也、勵、了、事、也、云、云、毛、利、奥、丸、家、家、者、也、了、事、也、云
而、昔、此、以、下、之、者、也、八、右、手、也、云、云、及、之、云、云、百
子、之、度、所、表、也、云、云、毛、利、奥、丸、家、家、者、也、了、事、也、云

別紙

三、秋、晋、作

桂、小、五、郎

小田村文助

村田治行三郎

吉田市之丞

信、本、男、也

波多野金吾

天、地、通、吉

小糸源義清

母三子孫

人十二人

法世八子即

山縣守忠飛

毛利貞元

山元貞利

古之者先年東家政以弟局一子
少排少中如高野退隱子在此地
今叔大信又子而裁許中後元
家督以下家政向一新領内法靜
中後元有子一人任國少將

毛利貞元

今般大信又子而裁許中後元
家督以下家政向一新領内法靜
中後元有子一人任國少將
弟之妻有子少排永井雅亦同稱者
高野退及又八姓亦中自者如之
少排妻任國少將
中元四之席也最初少排口述書
面とて此書常方少排有麻
五之席説如中元二席之在也

彼ノ藩用人五由六由後分ハ其捕
如ハ六津ノ討入リ如ク近斗是近
切角候ハ其後ハ預ル力ハ
御一ノ月今日先ハ
切ノノ月十日幸尾端
コ如ク波路多ハ後分ハ其捕
如ク遠方ノ事ハ其見ハ
藩一ノ月十日山石園ハ其者モ
其後分ハ其預ル力ハ其捕
其後分ハ其預ル力ハ其捕
其後分ハ其預ル力ハ其捕

其後分ハ其預ル力ハ其捕
其後分ハ其預ル力ハ其捕
其後分ハ其預ル力ハ其捕

一 五月九日 馬場分小田村
其後分ハ其預ル力ハ其捕

但本名山縣中其後分ハ其捕
其後分ハ其預ル力ハ其捕
其後分ハ其預ル力ハ其捕

後舟家来其六子夜引也其信との事連
 三月廿十日掛曉お疎所由の事
 七友人し者八日十日夜云別出は人出引
 渡おぬる後信舟八子夜分十有信しを
 了くし其のたさや二難多し酒宴を設
 け中三六梅迄分上切後お退めし中
 中酒込く事りまゝ酒宴中し中
 一 同日夜三藩執政辻將曹沛答は
 信舟信也三藩信との事老方沛沙汰は舟
 門洋船も在任事

右取曹沛答は長官の月夜三藩國情
 孫舟お通く速自其事旬日其の事
 學校社中より海く中其の事其意
 報汝友人の答は其の事其の事
 有りるし其事其の事其の事
 説信云も其の事其の事其の事
 合し其の事其の事其の事其の事
 友人し其の事其の事其の事其の事
 其の事其の事其の事其の事其の事
 其の事其の事其の事其の事其の事

酒部源藏
 堀井政吉印
 山本忠吉印
 正田信吉印
 三好忠吉印
 加藤治吉印
 三好忠吉
 酒部源藏
 田中徳吉印
 此者大幸立石孫一印一味一氏所砲突

汲海者を教害き免極多き意概
 と山中遊去り別上他國に於り机暴
 き免至り制書を省くことして海代
 きあるとの花

五月十日

神部源大捕掇のわら書
 次年汲海各々名物小室系を波守
 掇合の東者山崎出ると毛利大信父子
 御裁許は長後公後防長國民動搖均
 以却し越るる方己御文村上先手一人取り

速捷申 三島 抄付の指之 抄付 而書付
其心は 長悔の 友之有る 故に 抄付 一
少人 抄付 抄付 抄付 抄付 抄付 抄付
進言 抄付 抄付 抄付 抄付 抄付 抄付
抄付 抄付 抄付 抄付 抄付 抄付

五月十八日

幸山豊三三三
市川之山抄付

押原部 大浦内
上田 志馬

其の 抄付 反抄 抄付 抄付 抄付 抄付
三日 抄付 抄付 抄付 抄付 抄付 抄付
抄付 抄付 抄付 抄付 抄付 抄付

多り 抄付 抄付 抄付 抄付 抄付 抄付
抄付 抄付 抄付 抄付 抄付 抄付
抄付 抄付 抄付 抄付 抄付 抄付
抄付 抄付 抄付 抄付 抄付 抄付
抄付 抄付 抄付 抄付 抄付 抄付
抄付 抄付 抄付 抄付 抄付 抄付
抄付 抄付 抄付 抄付 抄付 抄付
抄付 抄付 抄付 抄付 抄付 抄付
抄付 抄付 抄付 抄付 抄付 抄付
抄付 抄付 抄付 抄付 抄付 抄付

難し場合有候も熟慮三思汝等并存
肯方く其旨を結納す下也其旨一存
意被包蔵自己に據出ホクシム反
布意少敷合し善旨を以て急夜也
下知お候儀候ハシ

今日 御意し趣子紙書付お事
御趣意候もお候存事と申趣也
東に十七日限了申也

五月十日

一 五月九日七ツ付頃長引藩旅者西幸町

旅者先産後後小田村吉太郎出陣捕
有階層者百人余り四洋に拂
以振は 後後刻也之に揚山島
和帰回は中右海後介は薩云
お候方所新一拜方没新と云
勢云要人物百人斗り外町
當りしお扱一日十五兩斗り
し中右海後介は是道日く汝
かへ先陰を送りし知らぬ
お成り事し毎あうら

近山抄

一 同日五日以前藩兵番一隊予人命岩園

境小瀬川中初攻海村近山掃出抄如中

一 海田市着山掃陣と柳原屋一時日追

高所あり多陣と百部村近山掃出抄

左端上明石山人牧掃出抄又此別山

と山人牧高所あり百部村南之村と

百部村と抄如中

一 五月九日完産海屋小田村素太郎官捕

山人牧左一通

火牧野着機守永井と水正行山掃二部

山人目有抄山人目有抄山人目有抄

千人隊二隊小队四隊

但回着抄言玉込平屋と山抄如

義兵列屋と山人牧

山人目有山人目有抄山人目有山人

所也三十人そ外柳り迄殺十人

人

長尾藩本初平と色江和地江使者取

向山藩小笠原系屋上兵由人但屋書字

しむるもな

一 高砂し四六大小の子多し去津門家

中七連の事一古事し先規お如所は

中如の所大之迷惑の所七首し困る

高砂ハ中如の所大之迷惑の所七首し困る

十九日夜返し星例高砂之危難

四月

珍木大隅下

長列脱走海中言生捕おぬ者

中如の事一古事し先規お如所は

一 永井雅中と在る所は我同人凡中如の事

国内より正義の者之世

一 流山家老の田越飯田幸藏と在る所

奇云流の飯田小左衛門と在る所

中如の事一古事し先規お如所は

一 領内山口田越の事

山口田越の事一古事し先規お如所は

一 山口の事

大砲五十挺備へ有し山石採山ハ大砲

八挺モル干し九挺地雷火百二十丁

出陣の難山之関門と在る所は

冥門寺より有る山に大砲八挺置
中流に三十挺置

山口外道に置

山口外道に置
山口外道に置
山口外道に置

山口外道に置

山口外道に置
山口外道に置
山口外道に置

山口外道に置
山口外道に置
山口外道に置

山口外道に置

山口外道に置

山口外道に置

山口外道に置

山口外道に置

山口外道に置

山口外道に置

山口外道に置

山口外道に置

一 苗之少收只系を階級中
 一 大砲製造に在る
 一 清之に在る
 一 除隊と交り中者有る
 一 除隊と交り中者有る
 一 一代之に銀振出
 一 藩別古漢砲造り
 一 下ノ買込地系に在る
 一 各個人と交易
 一 茶と買込の中
 一 階中
 一 者長崎

一 旨と交易
 一 者除隊中
 一 海人
 一 山内
 一 歳
 一 山縣
 一 山縣
 一 志
 一 志

一 山縣少卿為國古正海兵少將長茂
 此年十月以出使為國人下ノ冥下
 捷砲大分ノ右細中里ノ所ノ長
 一 大池ハ少卿ノ少
 直一ノ事ノ人持ノ少卿ノ東
 正美ノ少卿
 完戸海後分ハ正美ノ少卿
 大津部ノ少卿長兵ノ在右ノ内預ハ

一 長ハ激流ノ者正美ノ少卿
 一 公田古法討入古少卿ノ道有長茂
 一 大信長門ハ國內法方人扱少卿
 一 官所海軍長清ノ長門三田原上
 十ノ少卿人扱二少卿ノ浪士法方

一 藩に海を隔てて居る

但し火を止す中身押寄せし如千人命赤

根竹人隊本若田新以下之者利

勢を去りし者左外隔より右内隔と

中は浦親負し家来者若田中太郎大津

之即中正為し者少所は是も矢張

激流言中正為也先是進る木若

田新先陣し願わしは是言内隔と

結手者之隊入難お成り中即

一 井上登之助公赤雲隊し軍士之洋判官也

洋判官之世也

一 山々樹下ハ日月雨浪六少くふ越合し極

中の中如月し津也

石列治し山上に水しを切りて水城

中は押入の事左是を思はし

一 隠密し者諸方ト如也

若希左門治治之也 一 美東北如也

是は六政府公し中身交り少所は

外一向密し坊主多人牧諸方ト也

中ははし金列隊し者之少所は

桂小五郎急政勢儀より叔曹飛上
高府長府秋との間に古本播く所人
叔指揮 沙屋

一 和泉十郎切續の頃より

此年十一月に定信の末末に奉長府より
高府中へ福永若侍八和泉十郎と遊勇
より出陣不能理直所福田千馬高府へ
退及

一 高府家老若初より高府

之好近内子百石河川下野子百石

高府の勲 桂 隆及子石之田代音人

七百石石之田代音人

一 右の外 波の若初存長也

所幸川井上屋高四十歳熊野元帥三

六七歳西小文重四十五歳位七百石

洋判直者之也

人

丙寅年五月五日統玄列之廣嶋市在陣

長尾山 東照

孫紀治兵軍列

若 步兵組日並 撤兵隊日並

去工兵 步兵組日並 大砲隊日並 撤兵隊日並

步兵隊 戶田肥後守日並 城隊部日並 步兵隊日並 大隊日並

步兵組四百人 日並 津山潤太郎日並 步兵二 撤兵 大隊上同

騎兵隊 山々田隊日並 騎兵組六十騎 松浦桂日並 進軍

步兵目付 大平渡次郎日並 小同組大隊日並

小同組四百人 大砲組頂 高尾越十郎日並 大砲三指日並

大砲組百五十人 河野信勝日並 竹中丹後守日並

出先年二胆百人 出先年改 戸田寛十郎 家来 吉波守殿馬二百 家来 人

奥出諸軍胆 家来 川平胆込録方二十五人 家来 二人又交り

多賀外記 家来 多賀胆二十五人 家来 同 横山中左衛門 家来

木下大内記 家来 永井之水正 家来 宗賀伴務守 家来 同

牧野若校守 家来 同 平山通次郎 家来 同 少佐目付 家来

石川八十郎 家来 東 久世下野守 家来 同 井上啓次郎 家来 同

步兵一大隊 家来 同 四百人 浦津源左衛門 家来 同 步兵

一大隊 上同 四百人 軍目付 吉川金次郎 家来 同 少佐目付 家来 同 少小目付 家来 同

松平定房の御後

小田村素直

右ある所居多し其連の者大勢固し其有
了りて歸小御の御一の事なすむ右に越
え利身丸なりし

五月

三流云別機下と張机

今度之利大徳父子と彫科と清裁洋と
長谷川次子と僧と云ふ毎真日因光を
先山の振る大徳父子末末及士民此道
御越えし信弥清の振元大徳父子

白事申事の信我海民ハハの恩

了知乃至希有も能くお知良し如共友
清裁洋振 聖と、新ハ、少少南ハ、是末七
は、るる、金権權、後、徑、具、八、波、多、族
自己をお換、邪波を道、天下、私を新
終、江、川、カ、の、を、後、サ、ト、強、強、形、形
久、奉、對、神、君、上、忍、敬、使、家、派、強、道、連
逆、流、忠、意、を、征、伐、兼、中、央、と、云、云、子、勢、を、吹
拂、日、内、清、光、と、何、事、り、を、お、討、し、外、に、此
事、ハ、逆、忠、意、小、室、宗、直、を、波、と、兼、同、強、同

遂成半世東吳出くを礎 内憂外
患 皇國未嘗有之 大率三月清使
親之 少くも辛酉ノ年 又く清使白公
分 幕府之於与片一際 敵意清廷
奉 清使力出天下 疑議を解き上
下 清使清海 清使清海 清使清海
大樹公清上洛 勅諭台命 清使清海
天下 清使清海 清使清海 清使清海
台 清使清海 清使清海 清使清海
田 清使清海 清使清海 清使清海
款

田百 勅諭 清使清海 清使清海
皇國未嘗有之 大率三月清使
親之 少くも辛酉ノ年 又く清使白公
分 幕府之於与片一際 敵意清廷
奉 清使力出天下 疑議を解き上
下 清使清海 清使清海 清使清海
大樹公清上洛 勅諭台命 清使清海
天下 清使清海 清使清海 清使清海
台 清使清海 清使清海 清使清海
田 清使清海 清使清海 清使清海
款

しり安下ハ二列生民を以放脚と下は
法血も怒れ公清云

西黄五月 山家元年

清らまふと名年

乃思清雨扇積多年之清忠識一知煙
滅は公をたふし多事の内難に車は如
清寃罪を二雪す所忠く万一之報は
ふおぬしを後七日を曠は公多罪は
誠之以事思人の物も今般又くふ言易
清海は振ら 法血の中実を 悲愕悲位

しり安下ハ二列生民を以放脚と下は
法血も怒れ公清云
西黄五月 山家元年
清らまふと名年
乃思清雨扇積多年之清忠識一知煙
滅は公をたふし多事の内難に車は如
清寃罪を二雪す所忠く万一之報は
ふおぬしを後七日を曠は公多罪は
誠之以事思人の物も今般又くふ言易
清海は振ら 法血の中実を 悲愕悲位
しり安下ハ二列生民を以放脚と下は
法血も怒れ公清云
西黄五月 山家元年
清らまふと名年
乃思清雨扇積多年之清忠識一知煙
滅は公をたふし多事の内難に車は如
清寃罪を二雪す所忠く万一之報は
ふおぬしを後七日を曠は公多罪は
誠之以事思人の物も今般又くふ言易
清海は振ら 法血の中実を 悲愕悲位

市田原名を天下為世之遺り人し播
をらわ振り奉り必之を海にゆき若
痛念くゆりゆき振り奉り八城大難
高ゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり
その力を社稷を以て清復し其六
市田元々神鬼を以て天下八二列士民
其の心を怨を帰せん知るべきに
其の心を止むるを論じ日を曠く
其の心を止むるを論じ日を曠く
其の心を止むるを論じ日を曠く
其の心を止むるを論じ日を曠く

市田法方より書きて其の事
其の心を止むるを論じ日を曠く

西宮の事

長防士に中

在列之市家美吉川端相若代者
其の心を止むるを論じ日を曠く
其の心を止むるを論じ日を曠く
其の心を止むるを論じ日を曠く
其の心を止むるを論じ日を曠く
其の心を止むるを論じ日を曠く
其の心を止むるを論じ日を曠く
其の心を止むるを論じ日を曠く

東士民之新久大徳天子也 天者謂言
分夜之徳之由年之大徳一勵感激仕民
今般之官易少也 書之徳之由也
何今之仕也 何之由也 徳之由也
而一方迫切之情 何之由也 徳之由也
和字家之由也 何之由也 徳之由也
其何之由也 何之由也 徳之由也
若代之由也 何之由也 徳之由也
仕之由也 何之由也 徳之由也
又之由也 何之由也 徳之由也
文之由也 何之由也 徳之由也

之由也 何之由也 徳之由也
又之由也 何之由也 徳之由也
文之由也 何之由也 徳之由也
仕之由也 何之由也 徳之由也
若代之由也 何之由也 徳之由也
其何之由也 何之由也 徳之由也
和字家之由也 何之由也 徳之由也
而一方迫切之情 何之由也 徳之由也
何今之仕也 何之由也 徳之由也
今般之官易少也 書之徳之由也
分夜之徳之由年之大徳一勵感激仕民
東士民之新久大徳天子也 天者謂言

